文化財研究と地域をつなぐ実践

―飛鳥資料館の取り組みから―

はじめに　飛鳥資料館では、飛鳥地域の発掘成果を中心に、文化財の調査研究があきらかにしてきた、飛鳥の歴史や文化の展示をおこなっている。こうした展示は、歴史に興味を持つ層から一定の評価を得ているものの、多くの地域住民の間では認知度は決して高くない。

そこで、近年では、地域の産業の担い手や住民と協力した新たな活動を試みている。飛鳥時代と現代、文化財研究と地域をつなげることで、これまで飛鳥の歴史に無関心だった人々にも、歴史の魅力を伝えると同時に、飛鳥の地域産業や文化財をみつめなおす契機となることも意図している。以下、その実践の内容を報告する。

古代の曲物に迫る　平成30年度の秋期特別展『よみがえる飛鳥の工房―日韓の技術交流を探る』では、飛鳥池工房遺跡の発掘調査成果を中心に、飛鳥時代の生産技術を紹介し、イベント『古代の曲物に迫る』を開催した。イベントでは、飛鳥池工房遺跡から出土した曲物を通して、現代にも通用する古代の技術の高さや、その変遷を伝えることを目的とした。

イベントの企画段階で、出土木製品を研究する浦蓉子研究員から、曲物の綴じ技術を応用して、木の薄板を樺（桜の樹皮）で縫い綴じ、栞をつくるアイデアが出された。ものづくりの要素も入れたイベントとして、明日香村や桜井市の地域産業となっている林業や木製品工業ともつなげて、より豊かな内容となるように企画を練った。

桜井市は木材業が栄え、加工業者も多い。桜井市を踏査する中で、勝山曲輪製作所の勝山潤一氏と出会った。製作所では、ヒノキを建築材に加工した際に生じる端材を二次利用して曲物の側板を製作しており、現代の曲物技術をみることができる。そこで、勝山氏の協力を得て、イベントで現代の技術を紹介するために、板を曲げる工程を取材した。また、曲物用の材を薄く削った板を、イベント用の栞の材料に提供して頂いた。

曲物を綴じる樺も地域のものにこだわった。樺は吉野地域が一大産地だが、希少性が高く、一般への販売や卸はおこなわれていない。そこで、明日香村で林業を営む久住林業の久住一友氏の協力を得て、久住氏が管理する森のヤマザクラから樹皮を採取した。採取の過程や樺を磨く過程も写真などで記録し、イベントで紹介した。

図47　地域から提供された材料を使って製作した栞

曲物の綴じ技術については、奈良で活動する曲物職人、河内尚子氏の技術指導を得た。曲物の板に樺を通す穴をあけるための刃物の入れ方や、樺の綴じ方など、より詳細な現代の技術を知ることができた。

イベント当日は、まず、参加者自身が、古代と現代の曲物を比較・観察して、その違いや共通点を発表しあった。次に、浦研究員が、出土資料の研究から判明した曲物の歴史と製作技法の変遷を解説した。つづけて、勝山曲輪製作所における板を曲げる工程の紹介や、河内氏による実演を交えて、現代の曲物の製作技術を説明した。こうした講義を通して、曲物のつくり方は、古代から現代にかけて動力や燃料などの変化に影響を受けてはいるものの、基本的な要素は継承されていることを理解できるようにした。

この後、曲物の綴じ技術を応用した栞づくりをおこなった。参加者たちは、曲物の側板を加工した薄板を樺で縫い、曲物の綴じ技術を体験した。

参加者からは、「古代の事柄と現代の工芸の話とが聞けて、古代の事象で終わらないところがとくに素晴らしかった」「実際にさわれたり体験できるところも良い」「曲げわっぱを作りたくなりました。古代と今の違いをもう少し詳しく知りたかった」などの感想が寄せられた。古代と現代をあわせて紹介したことで、古代の技術の中身だけでなく、その普遍的な価値も伝えることができた。

貝に開いた穴のなぞを解こう！　平成31年度の春期特別展『骨ものがたり―環境考古学研究室のお仕事』では、遺跡から出土した動植物遺存体の調査を通して、歴史をあきらかにしていく環境考古学研究室の仕事を、全国各地の出土資料や標本などとともに紹介した。展示室の一画には、飛鳥地域で盛んだった貝ボタンづくりに注目したハンズオンコーナーを設け、昭和30年（1955）頃まで飛鳥大字で操業していた貝ボタン工場の残滓を所有者から譲り受けて展示した。

ハンズオンコーナーでは、たくさんの丸い穴があいた貝殻と、クイズの問題を書いたパネルを机の上に置き、

図48　飛鳥の貝ボタンづくりを紹介したハンズオンコーナー

図49　『ふるさと飛鳥を語る』イベント風景

回答は机の引き出しを開けてみられるようにした 。「同定にチャレンジ」では、完形の貝殻の標本と比較して、机に置かれた貝殻の種類を調べる問題、「観察・考察にチャレンジ」では、貝殻にあいた穴を観察して、この穴があけられた理由を考える問題を出した。引き出しの中には、回答だけでなく、遺跡から出土した貝ボタンの残滓を調査した環境考古学研究室の山﨑健研究員らの研究成果を紹介するパネルを置いた。さらに、奈良県の貝ボタン産業について解説したパネルも設置し、環境考古学研究室の研究紹介をきっかけに、地域の歴史への理解が深まるよう試みた。

来館者からは、「自分の家でも昔は貝ボタンを作っていた」「懐かしい」「こうしたものが遺跡から出土して研究対象になるとは」という声が聞かれた。いっぽうで、「飛鳥で貝ボタンを作っていたとは意外だった」「海に面していない奈良に、貝を使った産業があるなんて」と、この展示で近現代の飛鳥の貝ボタンづくり産業を知った人も多く、飛鳥の知られざる歴史の一面も紹介できた。このように、環境考古学研究室の仕事を紹介する展示に、貝ボタンづくりという、現在の飛鳥地域では失われた地域産業を取り込むことで、文化財研究の幅の広さを伝えるとともに、飛鳥の歴史・産業への興味を呼び起こすことができた。

ふるさと飛鳥を語る　令和元年度の秋期特別展『飛鳥―自然と人と』では、 飛鳥における自然と人との関わりを、川・石・森というテーマを設定して紹介した。展示づくりの背景には、遺跡や自然とともに生きる人々を紹介したい、という思いがあった。そこで、地域の人々が紡いできた歴史や産業を、地域の人々自身が語る「ふるさと飛鳥を語る」というイベントを企画した。当日は、明日香村ゆかりの５人の方が語り手となり、展示室でギャラリートークをおこなった。

豊浦大字の薮内登美子氏からは、飛鳥川の水を炊事や洗濯に利用していた昭和初期の思い出話が語られた。薮内氏が父から聞いた大正時代の水害や、自身が経験された昭和の大水の被害も証言された。

明日香史跡研究会のメンバーだった篁園勝男氏は、甘樫丘から真神ケ原を望む古写真（1970年福井清康撮影）に関連して、昭和40年代の飛鳥の景観や会の活動を紹介した。飛鳥保存の議論が進む時期に、地域の若者達が歴史や文化を共に学び、保存運動を盛り上げていった経緯も語られた。

続けて、明日香村の歴史の掘り起こしと記録に取り組まれている明日香文化協会の境山正甫氏が、越大字出身の高取藩藩医・服部宗賢の事績と、豊年橋架橋の功をまとめたオリジナルの紙芝居を披露した。わかりやすい語り口に参加者たちは熱心に聞き入っていた。

最後に、明日香村森林組合の長尾知治氏と冬野大字出身の木村源司氏が、昭和初期から現代までの森の変化や、林業の現況などを紹介した。林業の仕事の厳しさや木材の運びだしの方法など、自ら経験しているからこそ語れる具体的な話には、参加者からも質問が相次いだ。

イベントの参加者には、飛鳥の歴史に興味を持つ人だけでなく、明日香村に移住してきた若い世代や地域住民の姿も多くみられた。「非常に貴重な話が聞けてよかった」「今後の自然との関係を再考する良い機会になった」という声も寄せられた。また、会場設営時に年配の参加者に配慮して椅子を用意したところ、参加者の大半が椅子に腰を掛けたままイベントが進行することとなった。その結果、会場内にリラックスした雰囲気がうまれ、参加者が語り手に気軽に質問したり、イベント終了後も参加者と語り手が和気藹々と歓談したりと、双方向的なやりとりを深めることもできた。

まとめ　集落踏査等で地元の人々と関わる中で、飛鳥の風景をつくってきた「地域の人々」は、この地の大きな魅力の一つである、と切実に感じている。一見無関係にもみえる、「飛鳥時代の歴史」と「現代の地域の暮らし」とを、飛鳥ならではの自然や産業を通してつなげて紹介することで、歴史展示の意義をより深めることができのではないだろうか。今後も地域との連携を深めながら、飛鳥の魅力を発信していきたい。

本稿はJSPS科研費JP17K01221による。　**（西田紀子）**